



## 手のひらが受け継ぐもの

本田 佳奈 (COE研究員・PD) HONDA Kana

これまで6年間、九州大学の大学院に所属し、九州各地でムラの現地調査をおこなってきた。地域に残る小さな地名(通称地名)と、それらにまつわる農・林・水産業のあり方を古老から話を聞く。それに古文書の持つ情報を補い、過去の村落像を具体的に描き出す...というのが指導教授の研究方法だった。まず現地ありきという姿勢と方法論に憧れた。

しかし、調査に行ってみると、自分が背負う2つのハンデに気づいた。1つは都会育ちで生業経験がなく、古老の話を把握する能力が著しく低いこと。最初は「通称地名」や「井堰」の意味も分からなかった。「杉皮で屋根を葺くとき、こうして、こうして、こうしたら(と手を動かす振りをして)雨が漏れんでしょ。ね?」と言われてもボカンとしていた。そして2つ目のハンデは「時代」だ。これまでの研究者は、明治生まれの人から話を聞くことができたし、旧態の景観・生業を調査することができた。今のムラは圃場整備や造林の荒廃によって景観が変化している。過疎化、高齢化、そして後継者不足。指導教授も「わたしは時代の最後を歩く」と語っている。では、昭和51年生まれの私は、もう日本のムラの歴史も生業も、消え去るのを見守るだけなのか。現地調査とは絶滅種のデータブック作りと同じなのか。30年たって、それまでの調査を過去の遺物として語りたくないなあ...とも思った。

そんなころ、棚田・造林の修復ボランティアで新しい友人ができた。写真1はその一人である美穂ちゃん(31)の手だ。神奈川の市街地に生まれ育ち、今は福岡の志摩半島で小さな農園を持つ。無農薬で丹念に育てたトマトやオクラや人参は、みんなおいしい。写真2は同じくボランティア参加者の田仲君(30)の手。北九州で生まれ育ち、山に憧れて宮崎県の西米良で山師になった。ちなみに西米良の山は、「えっ、ウソでしょ?」と言いたくなるような急傾斜地だ。2人は傾斜のある作業地でも身軽だったし、作業仲間に対する目配り、心配りも身に付けていた。私たちは同世代だ。20代はじめの頃、彼らは土に根ざした仕事を始めた。ちょうど同じころ、私も現地調査を始めた。それから10年近くたち、軟弱であったに違いない彼らが、じいちゃん・ばあちゃんたちと同じ身のこなしで働いているのではないか。そして彼らの話はとてもおもしろかった。作業を終えた夕方、田仲君は鉈を丁寧に研ぎながら、西米良の山の様子を話してくれた。美穂



美穂ちゃんの手



田仲君の手

ちゃんはボランティア終了後、月に2回野菜を届けてくれた。田畑で育んだ食への思い、手間隙がもたらすありがたさをつづった、可愛いイラスト付の通信を添えて。2人が働く場所には、解決しがたい現実問題がたくさんある。それでもこの道を選び、黙々と日々の業を深めている。頼もしい同志を得た気分にもなり、嬉しかった。

古老は間違いなく減っていき、聞きこぼす話は限りなくある。それは承知の上で、聞き続けていきたい。滅びる生業技術もたくさんあるが、確実に受け継がれているものもある。何よりも大切なこと　ヴィジョンを描き、体で実現させる力　は、若者の手のひらにしっかりと受け継がれている。先ほどの2人に手を見せてほしいとお願いすると、「汚いよ～」と照れていた。「昔に比べて何かとカサカサするようになった」とも。彼らの手のひらと、彼らが語る言葉の間には、何の矛盾もなかった。これから10年後、30年後、彼らの手のひらを写真に撮り続けたいと思う。彼らはこれから何を生み出し、どんな世界を作るのだろう。そしてどんな言葉を語るのだろう。未永く付き合って、色んなことを教えてもらいたいなあ、と思っている。